

日本語学習者の外来語の誤表記に関する一考察

富田 彩月

要旨

本研究は、中国語・英語・韓国語・ベトナム語を母語とする日本語学習者37名を対象に、外来語の誤表記の種類を調査したものである。文脈で対象語を英単語で提示し、その英単語と同じ意味の日本語単語を書かせた。分析の結果、誤表記数の約8割が長音に関するものであることや、促音に関する誤表記は英語母語話者に集中していることがわかり、いくつかの先行研究（趙 1992、山縣 1999など）の結果を支持するものとなった。これらの誤表記の原因として、母語の影響や、日本語特有の拍感覚の認識不足が考えられる。

キーワード：外来語習得、外来語誤表記、長音、促音

1. はじめに

日本語を外国語とする学習者にとって漢字や漢語の習得が困難であることが注目される傾向があるが、外来語も習得を困難としている事実がある。日本語学習者にとっては、英語を知っている場合でも、原音とずれた変容を多少とも伴う外来語（“radio” /rérdiòu/ が「ラジオ」/razio/など）の理解が難しい。これを受け、1990年以降、日本語教育におけるカタカナ語習得研究（小林他 1991、山縣 1999など）が行われてきた。それらの研究の多くは英語母語話者を対象としたものであり、日本語学習者が多く存在するアジア圏出身の学習者を対象にした研究はまだ少ない。そこで、本研究では、英語圏とアジア圏を含む4か国出身の日本語学習者を対象に、外来語を表記する際の誤表記に焦点を当て、その特徴を考察する。

2. 先行研究

2.1 同根語が第二言語の語彙習得に与える影響

日本語における外来語は他言語から借用した語彙であり、その外国語が翻訳

されずにそのまま用いられ日本語化したものである。現在の日本語の外来語の多くは英語を原語としており、その場合、和製英語を除くと英語は日本語の外来語の同根語となる（大和・玉岡 2013）。同根語とは、共通の起源を持つ単語を表すものであり、2つの言語間で知覚できるほど類似した表記と意味をもつ語である（Anthony 1953）。例えば、英単語の“night”とドイツ語単語の“nacht”は、いずれもインド・ヨーロッパ祖語の単語である“nokt-”から派生したものである。したがって、ある語を覚えやすくするための方法の1つに、形または意味が母語（以下L1）と似ている語と、第二言語（以下L2）の対象語を関連づけるという方法がある（Laufer 1990）。しかし、同根語は第二言語語彙習得（以下L2語彙習得）を促進する面もあるが、それは必ずしもL2語彙習得において有利になるわけではない。L1の語と形が似ているがL2では意味が異なる場合、母語の干渉が起これ、母語の存在によってL2語彙習得の際、混乱をまねく恐れがある（Laufer 1990, Ryan 1997）。

Greidanus, Beks & Wakely（2005）は、母語がオランダ語の上級以上のフランス語学習者（大学1, 3, 4年生、学習歴6年以上。以下L1オランダ語グループ）と母語が英語の上級以上のフランス語学習者（大学1, 4年生、学習歴5～7年。以下L1英語グループ）、そしてフランス語母語話者（大学1, 3年生）149名を対象に、使用頻度が高い5千～1万のフランス語のうちから47語を選出した語彙テストを実施した。フランス語は英語に多くの同根語を含むため、語彙テストには23の同根語と27の非同根語が含まれた。そのため、母語の効果により、L1英語グループの方がフランス語の語彙テストにおいて有利であると想定されていた。しかし語彙テスト得点の分析では、一部、想定とは逆の結果となった。つまり、L1英語グループの大学4年生は、L1オランダ語グループの大学3, 4年生より、得点が統計的に有意に低い結果となった。この原因と理由は不明だとし、更なる研究が望まれるとGreidanus et al.（2005）は述べている。Greidanus et al.は調査対象者の学年差を能力差として分析・考察しているが、果たして学年と能力は比例するのかという疑問が残る。しかし、この研究結果は、上述したようなL2語彙習得においての母語の干渉、つまり同根語の負の影響による可能性もある。

2.2 日本語を対象とした外来語習得研究

大曾（1991）や小林・カッケンブッシュ・深田（1991）は、英語を母語とする日本語学習者を対象に提示された英単語をカタカナで表記させるテストを行い、その誤答を分析する調査を行った。大曾（1991）が70名のアメリカ人中級日本語学習者（JSL）を対象に行った調査の結果、原語である英単語でアクセントのある母音を長音で表記するという誤答が見られた（“knob”（「ノブ」）が「ノーブ」など）とし、これは「カタカナ語の音形は原語の音形に基づく」という原則を学習した結果の間違いであると考察している。また、小林他（1991）は英語を母語とする日本語学習者23名を対象に、大曾（1991）と同じ方法と手順で、英単語をカタカナ表記させる調査を行った。この調査の結果では、促音挿入（「フロア」が「フッロア」など）、子音および半母音の日本語化（「ディズニー」が「ディシニー」など）と、長音となる母音の日本語化（「ボール」が「ボル」など）は正答率が低いことが報告された。つまり、この調査では特殊音節である促音、長音、拗音についての誤答が多く見られた。

大曾（1991）や小林他（1991）でも指摘されているが、英語母語話者である日本語学習者の外来語表記の誤用として問題となるのは、促音挿入のようである。山縣（1999）は、英語を母語とする日本語学習者120名（大学1～4年生、外来語知識は少ない）と日本人大学生100名を対象に、英語を日本語で表記させることにより、第二言語学習者の中間言語を調べる調査を行った。材料はまだ日本語に定着していないと考えられる英単語25語で、これを日本語学習者、日本語母語話者ともに最も自然と思われるカタカナで表記させた。その結果、日本語学習者のカタカナ表記の中で、促音化の割合が日本人より大幅に低いことがわかった。しかし、日本語学習者の学年が上がれば上がるほど、促音化は日本人のカタカナ表記に近くなった。山縣の調査対象者の詳しい日本語能力は不明だが、学年が上がるほど、日本語学習時間は増えるはずである。そのため、日本語学習時間が増えるにしたがい、日本語学習者は日本語の拍感覚やカタカナ表記の際の促音化の規則を身につけられる可能性がある。

一方、アジア圏出身の日本語学習者を対象にした外来語表記の調査として、趙（1992）があげられる。趙（1992）は韓国語を母語とする日本語学習者49名（大学2，3年生）を対象に、外来語を表記させた際の誤用分析を行った。材料は、基本語2,000（国立国語研究所 1984）から選出された50語と、韓国

の高校で使われている8種類の日本語教科書の中で4種類以上に出ている14語の、計64語を対象語とした。その外来語を韓国語で示し、日本語の外来語に訳してカタカナで記述するよう指示した。その結果、最も多かった誤りとして長音の脱落があげられた。たとえば、「スーパー」を「スーパ」や「スパ」、「サッカー」を「サッカ」、「サーカ」と表記するなどである。次に多かった誤りは、「ホテル」を「ホテール」、「キロ」を「キロー」と表記する長音の挿入であった。長音に関する誤りは拍感覚の認識不足が原因であると思われる、趙は考察している。

また、富田（2013）は、初級から上級の日本語学習者33名を対象に、受容語彙テストと産出語彙テストを行い、外来語知識を調査した。受容語彙テストは聞き取り形式で行い、産出語彙テストでは英単語で提示された対象語と同義の日本語を記述させ、和語・漢語・外来語の正答率を比較した。その結果をアルファベット圏出身者（初級、11名うちアメリカ人10名、スウェーデン人1名）と非アルファベット圏出身者（初級から上級、22名、アジア圏出身）とで比較した結果、受容語彙テストでは19.3点差で非アルファベット圏出身者の方が得点が高かったのに対し、産出語彙テストでは2.7点差まで縮まった。その原因として富田は、問題形式の点で産出語彙テストの方が容易なものであることと、アルファベット圏出身者にとって英語由来である外来語は習得しやすい語種なのではないかと考察している。もしくは、英単語が与えられているため、未習語彙でもカタカナ表記することができた可能性がある。一方で、両語彙テストにおける外来語の誤表記の割合は、アルファベット圏出身者に多く見られた。したがって、英語母語話者にとって同根語にあたる外来語を習得する際の、同根語の効果と干渉がともに観察された。

Greidanus et al. (2005) や富田（2013）の研究から、L2語彙習得において同根語の正の影響と負の影響があることがわかった。また、大曾（1991）や小林他（1991）、山縣（1999）の研究から、英語を母語とする日本語学習者は外来語表記の際、長音と促音に関する誤表記が多いことがわかった。その原因としては、母語である英語の影響により拍感覚が日本人とは異なるためであろう。一方、韓国人日本語学習者は外来語を表記する際、長音に関する誤表記が多いことがわかった（趙 1992）。以上のことから、日本語学習者は母語により、外来語の誤表記の種類に共通点と相違点がある可能性が示唆される。

3. 本調査

本研究は、以下の質問を提示する。

質問1. 外来語の誤表記の種類は、日本語学習者の母語背景の違いにより異なるか。

3.1 調査対象者

本調査の対象者は、首都圏の日本語教育機関に所属する日本在住の日本語学習者37名である。そのうち、26名（L1中国語12名、英語10名、韓国語2名、ベトナム語2名）は2012年7月に調査を行い、11名（全員L1中国語）は2014年2月に行った。調査対象者の日本語習熟度は、初級から上級である。

3.2 材料

本調査では産出語彙テストを行った。問題は文脈形式で、空欄の下に英単語を提示した。時間はどれだけかかってもよいので、その英単語と同じ意味の日本語の単語をできるだけ多く書くよう指示した。対象語はカタカナで表記される英語由来の外来語24語である(表1)。対象語は全て、国際交流基金(2007)『日本語能力試験・出題基準』で1級から4級までの語群に含まれており、かつその類義語として同基準で1級から4級の語群に含まれる和語と漢語を持つと判断された外来語である。1級の外来語は6語、2級は14語、3級は1語、4級は3語であった。また、非英語母語話者には英単語自体の意味がわからない場合を想定し、対象語である英単語から調査対象者の母語へと訳された辞書のコピーをいつでも閲覧可能とした。文章は単文であり、文章に用いた空欄以外の語彙・文法は初級教科書で扱うような難易度が低いものである。文章は合計23文あり、そのうち1文のみが空欄を2つ含んでいる。また文章は分かち書きではなく、すべての漢字にルビがふられている。そして日本語習熟度が初級の学習者への解答用紙には、『日本語能力試験・出題基準』で2級以上と指定されている語にのみ、語の英語訳をつけた。

問題例

回答例

() の予約(よやく)をする。

ホテル、旅館、宿

hotel

表1. 対象語

コピー	パーティー	ホテル	パパ	アイディア	イメージ
カー	カバー	ケース	ショップ	ストップ	パイプ
プラン	ホーム	ママ	ミス	ライト	オーケー
ショー	セール	ヒント	フォーム	マーク	ビル

3.3 分析

産出語彙テストの採点にあたっては、外来語の正答は国際交流基金（2007）を基準としたが、日本語母語話者でも表記のゆれがあるとされる「オーケー」は「オッケー」、「アイディア」は「アイデア」も正答とした。誤答の分析にあたり、「長音」「促音」のそれぞれについて「挿入」と「脱落」に分類した。「挿入」は、 unnecessary 長音または促音が表記されている場合（例「カバー」が「カーバー」、「ミス」が「ミッス」など）である。「脱落」は、表記すべき箇所に長音または促音がない場合（例「イメージ」が「イメジ」、「ショップ」が「シヨプ」など）である。その他の誤答については「その他」に分類した。本調査では、語中と語尾を含め、長音挿入、長音脱落、促音挿入、促音脱落が見られた誤答数を主に報告する。なお、和語と漢語の正答は、日本語母語話者8名、上級日本語学習者1名を対象としたパイロットテストの結果と辞書を参考にして設定した。採点の結果、和語や漢語には長音や促音に関する誤表記は一切見られなかった。

4. 結果と考察

本調査で得られた日本語学習者が産出した外来語の誤表記の分析結果を、母語背景別に表2に示す。調査対象者全体で最も多かった誤答は「コピー」「ホテル」などの長音挿入で25個であり、次に「フォーム」「オーケ」などの長音脱落で20個であった。また「ショウ」「セール」と長音が母音表記された誤答が2個、「ストープ」と促音が長音で表記された誤答が3個、「シヨプ」「ストプ」とされた促音脱落が2個、「ミッス」とされた促音挿入が2個、そして「ストップ」と清音が濁音で表記された誤答が2個、「シヨン」と長音が撥音表記された誤答が1個であった。

全体としては長音に関する誤表記が多く、観察された誤表記のうち8割以上を占め、韓国語母語話者のみならず、中国語、英語、ベトナム語母語話者にも同様の結果が見られた。この結果は、韓国語母語話者を対象とし日本語の外来

語表記を調査した趙（1992）を支持するものである。長音に関する誤表記が多い原因としては、対象者の拍感覚の認識不足（趙 1992）と、母語にある外来語の影響であると思われる。

また、促音に関する誤表記については、数は少ないものの英語母語話者に集中しており、この結果は大曾（1991）、小林他（1991）、山縣（1999）を支持している。英語母語話者における誤表記の原因としては、英語が原語の外来語が日本語でどう表記されるかについての認識不足が考えられる。例えば、原語でのアクセントが強い音節に長音が挿入されてしまう傾向が見られた（「ホテル」や「プラーン」など）。これは大曾（1991）でも指摘されており、対象者が「外来語の音形は原語の音形に基づく」と考えカタカナ表記した結果の誤りと言える。さらに促音挿入に関しては、大曾は中級の英語母語話者が外来語をカタカナ表記する際の最も難しいことだと述べ、その理由として、規則の一般性が低いということを挙げている。しかし、山縣の研究から示唆されるように、日本語学習時間が長くなるにつれ、促音化の規則を自然と身につけられる可能性がある。本調査のL1英語である調査対象者はみな、日本語習熟度が初級である上に短期日本滞在者であった。そのため、日本語と接してきた時間が短く、音韻規則に気づいたり習得したりする機会が少ないことも促音の誤表記の一因として考えられる。

表2. 母語背景別にみる外来語の誤表記の種類と頻度数

誤答の種類		全体 (n=37)	母語背景			
			中国語 (n=23)	英語 (n=10)	韓国語 (n=2)	ベトナム語 (n=2)
長音	挿入	25(44%)	12(50%)	8(38%)	4(40%)	1(50%)
	脱落	20(33%)	7(29%)	7(33%)	5(50%)	1(50%)
	母音表記	2 (4%)	0	1 (4%)	1(10%)	0
促音	長音表記	3 (4%)	2 (8%)	1 (4%)	0	0
	脱落	2 (4%)	0	2 (9%)	0	0
	挿入	2 (4%)	0	2 (9%)	0	0
その他		3 (4%)	3(13%)	0	0	0
合計		57 (100%)	24 (100%)	21 (100%)	10 (100%)	2 (100%)

5. 結論

本調査で、日本語学習者が外来語を産出する際に見られる誤表記には、全体としては長音に関する誤表記が8割以上と多いが、誤表記の種類については、日本語学習者の母語により異なることが観察された。英語母語話者は促音に関する誤表記が非英語母語話者より多く、中国語、韓国語、ベトナム語母語話者は長音に関する誤表記に集中した。

6. 教育的示唆

日本語学習者の外来語の誤表記に関する調査は極めて少ないが、本調査から、長音に関する誤表記が多く観察された。誤表記を防ぐための指導として、外来語の日本語化規則を学習者に教えることが有効だと思われる。それは、山縣（1999）で日本語学習時間が長い学習者の方が促音化率が高かったことから示唆できる。外来語の日本語化規則について、たとえば大曾（1991）が述べているように、英語の単語でアクセントがある音節の母音はその発音に基づいて日本語化すること、そして英語の単語でアクセントのない音節の母音はスペルに基づいて日本語化することを学習者に教える必要があると思われる。またこれは母音においてのみあてはまることで、子音は原則として音声によって日本語化される。このような規則をカリキュラムや授業の中に組み込み明示的に指導することにより、英語母語話者だけでなく、英語をよく知る非英語母語話者もカタカナ表記する際の誤りが減ると思われる。

また学習者の母語にある外来語の存在も、日本語における外来語習得において大きな影響を与えているであろう。そのため、学習者の母語にある外来語の存在について意識化させ、学習者に母語と日本語の外来語の違いについて気づかせることが必要ではないだろうか。また、海外で日本語を指導する場合は、その国の外来語を知り、学習者がどのように外来語表記を間違えやすいのかを教師が把握しておく必要があると思われる。そうすることにより、学習者の正しい外来語表記の習得を促すことができるだろう。母語の影響は容易に回避できることではないが、日本語学習初期の段階から、学習者の外来語の誤表記を修正していくことが必要だと思われる。

7. 今後の課題

本調査は対象者の人数が少なく、母語背景別による比較分析が充分に行えなかった。また、対象者のうち、英語母語話者は初級学習者が多いのに対し、非英語母語話者は中級以上の学習者が多かったため、外来語の誤表記には日本語習熟度も関わっている可能性がある。今後、日本語学習者の外来語の誤表記に関してより信頼できる調査結果を得るためには、対象者の人数を増やし、母語背景別でもバランスのとれた人数を確保することが必要である。さらに、対象者の日本語習熟度の均一化、もしくは日本語習熟度別の分析も行う必要がある。

本調査では、短い文脈と英単語を提示して外来語を産出させる産出語彙テスト後、その応答データをもとに外来語の誤表記を分析した。しかし今後、外来語の誤表記に焦点を当てた調査を行う際は対象語の数を増やすだけでなく、本調査の結果をもとに、長音や促音が含まれている外来語を多く対象語に含むべきであろう。また、テスト形式にも課題がある。英単語で対象語を提示するのではなく、写真や絵で対象語を提示したほうが、対象者の外来語知識をより正確に測定できるだろう。英単語を提示するとそれが視覚情報となり、未知語の場合でも推測してカタカナ表記してしまう可能性があるためである。

謝辞

本調査研究は、2013年1月に執筆した修士論文『日本語学習者の外来語の習得—語彙テストとピリーフ調査の結果をもとに—』で行った調査の一部を発展させて行ったものである。調査および論文執筆にあたりご指導くださった堀場裕紀江先生に深く感謝申し上げる。また、大学院の先輩方や同期からも貴重なご意見をいただいた。心より御礼申し上げます。

注

¹ この調査（富田, 2013）は、JSLである日本語学習者33名（L1中国語12名、英語10名、タイ語5名、韓国語2名、ベトナム語2名、スウェーデン語1名、モンゴル語1名）を対象に、彼らの外来語知識を調べることを目的とし、受容語彙テストと産出語彙テストを行ったものである（本文2.2参照）。産出語彙テストでは、語種間（和語、漢語、外来語）の習得状況を比較するため、和語と漢語に同義語をもつ外来語を対象語として選出した。本調査では、産出語彙テストの回答で外来語の誤表記が見られた26名を対象者とする。両語彙テストの結果など、詳しくは富田（2013）を参照されたい。

参考文献

- Anthony, E. (1953). The teaching of cognates. *Language Learning*, 4, 79-82.
- Greidanus, T., Beks, B., & Wakely, R., (2005). Testing the development of French word knowledge by advanced Dutch- and English-speaking learners and native speakers. *The Modern Language Journal*, 89:2, 221-233.
- Laufer, B. (1990). Ease and difficulty in vocabulary learning: some teaching implications. *Foreign Language Annals*, 23:2, 147-155.
- Ryan, A. (1997). Learning the orthographical form of L2 vocabulary –A receptive and a productive process. In Schmitt, N. & McCarthy, M. (Eds.). *Vocabulary: description, acquisition and pedagogy* (pp. 181-198). New York: Cambridge University Press.
- 大曾美恵子（1991）「英単語の音形の日本語化」『日本語教育』74, 34-47.
- 国際交流基金（2007）『日本語能力試験 出題基準[改訂版]』凡人社.
- 国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版.
- 小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田淳（1991）「外来語にみられる日本語化規則の習得－英語話者の調査に基づいて－」『日本語教育』74, 48-59.
- 趙南星（1992）「韓国人日本語学習者による外来語表記の誤り－日本語話者による評価を中心として－」『日本語教育』78, 178-190.
- 富田彩月（2013）「日本語学習者の外来語の習得－語彙テストとビリーフ調査の結果をもとに－」修士論文, 神田外語大学大学院言語科学研究科.
- 山縣亜矢子（1999）「英語を母国語とする日本語学習者によるカタカナ語表記の習得に関する調査」『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』アラム佐々木幸子（編）49-64. くろしお出版.
- 大和裕子・玉岡賀津雄（2013）「中国人日本語学習者による外来語処理への英語レキシコンの影響」『レキシコンフォーラム』6, 229-267.